

エッセイ

コンラッドとヨーロッパ東部境界地域 —2012年ポーランド・ベラルーシ訪問記—

設楽靖子

はじめに

この訪問記は、2012年8月23日～9月1日の10日間、「国際移動セミナー〈クラクフからミンスクへ〉——ヨーロッパ東部境界地域の共有遺産研究 第3回」という研修バス旅行に参加した、その見聞を報告しようとするものである。この「国際移動セミナー」は、東京外国語大学を中心とした日本のポーランド研究者たちが、クラクフにある公的機関 International Cultural Centre (ICC)の協力のもと、旧ポーランド領（現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナの一部）を移動する研修旅行として計画されたものであり、第1回「ガリツィア」（2008年）、第2回「リトアニア」（2010年）がすでに実施済みで、今回の第3回は「ベラルーシ」が対象であった。実際の移動方法は、20人の日本人研究者と、先行調査を済ませたICCの職員2人が1台のバスに乗り、先々では現地の専門家の解説を受けるというもので、参加者のほぼ全員が現地語を習得したうえでの研究テーマを持っており、移動ルートは彼らの関心に沿って計画されていた。

当然ながら、この移動セミナー自体、コンラッドゆかりの地をめぐるという発想とは全く無縁である。にもかかわらず、現地語未習の私がこのセミナーに参加を希望した動機は、「ヨーロッパ東部境界地域 Eastern Borderlands of Europe」という概念自体がコンラッド研究に関わると期待したからであり、“Conrad’s Polish background”に関して、より広いコンテキストで接近したかったからである。実際に参加してみて、その期待はいくつかの成果になったと考える。それを何とか文章にしてみようとしたのが、この訪問記である。

ゆえに、この訪問記のタイトルを「コンラッドとヨーロッパ東部境界地域」とし、参照する地図として**地図 1**「ポーランド国境の変遷」を使う（吉岡 2012 から転載）¹。今回の「クラクフからミンスクへ」という移動行程を大雑把に**地図 1**で見ると、Kraków と Minsk を結んだ地域であり、ポーランドの東部とベラルーシの西半分にあたる。一方、コンラッドの出身地 Berdychiv や Zhytomyr などは、Kilów（キエフ）と Lwów（ルヴフ[現リヴィウ]）を直線で繋いだ線の真ん中あたりで、Minsk とほぼ同じ経度という位置関係になる²。

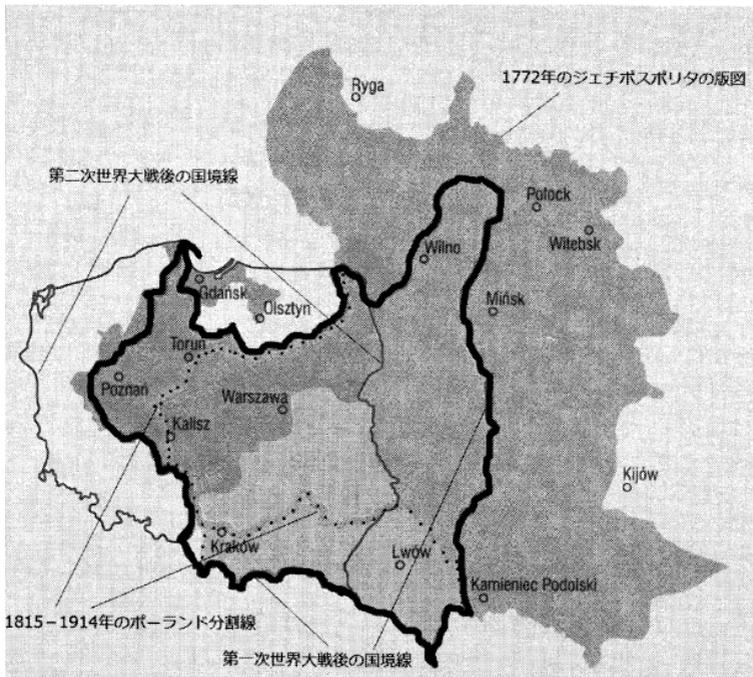
なお、今回この移動セミナーとは別に、ポーランド国内でのコンラッドゆかりの地（ワルシャワ、クラクフ、ルブリンの3都市）を個人で回ったので、そこでの見聞も合わせて報告する。以下、まず「ヨーロッパ東部境界地域」を定義したうえで、「ポーランドの3都市」について個人旅行での見聞を記し、次に「ベラルーシ」として移動セミナーでの訪問地の中からコンラッドの生涯・作品との関係が垣間見えた地点を抽出して記す。最後に、近年クラクフに設置された Joseph Conrad Research Centre 訪問について一筆しておく。

1. ヨーロッパ東部境界地域

コンラッドの伝記の中で「ベラルーシ」という地域名・国名を見かけることはなく、今回の移動セミナーのルートには通常の意味での「コンラッドゆかりの地」は含まれていない。にもかかわらず、この旅行が貴重な体験となり得たことを説明するには、この移動セミナーのタイトルにある「ヨーロッパ東部境界地域」という概念が鍵となる。その定義と意義について、移動セミナー第1回（ガリツィア）の報告書を参照・引用する³。

この移動セミナーは、もともと日本のポーランド研究者たちを中心に、ポーランド語で「クレスィ Kresy（名詞・複数形）」と呼ばれる地域への強い関心から生まれたものである（関口 11）。Kresy とは、「かつてポーランド王国とリトアニア大公国が一つの大きな連邦を形成していた時代にその領土だった地域から、現在のポーランド共和国領土を引いた部分」（ibid., 12）であり、これらの地域全体を「現在のポーランドから見て」の言葉であ

る。日本語では「旧東方領土」「東部境界地域」「辺境地帯」などと訳されるが、たとえば「16世紀半ばから20世紀末までのポーランド文学に現われた地名の多く... 半分以上」が、現在のポーランド共和国領土内ではなく、「クレスィと呼ばれる領域」にある。そして、そのことは、「19世紀の三国分割時代や、20世紀半ばにクレスィを“失って”（ポーランド的視点からは喪失として語られる）以降」も、「近代ポーランド文化におけるクレスィの“中心性”を物語っている」(ibid., 12-13)。にもかかわらず、これらの地域は、現地語を習得した研究者さえ個人で回るのは容易でないことから、東京外国語大学ポーランド科を中心に、冒頭で述べたような形での移動セミナーが企画された。ゆえに、今回の移動セミナーの行程は、この関心に沿って、ポーランドの歴史的文化遺産（ないしその名残をとどめるもの）として、教会、史跡、城塞、マグナート（有力貴族）の邸宅・居城、シュラフタ（士族）の屋敷などを中心に組まれていた。



地図1 ポーランド国境の変遷（吉岡 2012）

ここで言う「かつての大きな連邦」は、三国分割前のポーランド＝リトアニアのことであり、**地図 1**の中で「1772年のジェチポスポリタの版図」と記された広大な領域を指す。「そこから現在のポーランド共和国領土を引いた部分」は、**地図 1**で見れば「第二次大戦後の国境線」の東側全域にあたり、そこが「東部境界地域」である。この地図の中、その版図をくっきりと分断している太線は「第一次世界大戦後の国境線」であり、私が今回の旅行での収穫と考えているのは、この太線が *Conrad's Polish background* を理解する上で要となる、という点である。前述のように、ウクライナにおけるコンラッドゆかりの地はこの太線の東側に位置する。この位置関係を念頭に、*A Personal Record* (1911)、“*Prince Roman*” (1911)などを片手にポーランドと「東部境界地域」の一部であるベラルーシを歩けば、何が見えるか。

2. ポーランド 3 都市

コンラッドの伝記で言及されるポーランド国内の都市・町を訪ねることは、その気になれば容易に可能である⁴。案内となる文献もあるので(Krajka 1991 など)、今回の個人旅行で回った 3 都市の中から、実際に行ってみて初めて気づいたことのみを抽出して記す。

ワルシャワ 市の目抜き通りである「新世界通り」(Nowi Świat) 47 番地の建物に、1861年にコンラッドの両親が住んでいた部屋がある。そのこと自体は伝記で知られたことであるが、その旨を記した入り口の案内板と並んで、作曲家カロル・シマノフスキ(1882-1937)も 1924-29年に同じ建物に住んだという案内板があった。シマノフスキは 1920年 12月末にコンラッド宅を訪問しており、新進気鋭の作曲家がロンドンに寄った際に同じ出身国の作家を訪問したのであろうが、このシマノフスキもウクライナのシュラフタ出身という点でコンラッドと同郷であった(Najder 532)。同じウクライナでもシマノフスキは更に東の地方の出身であり、1919年に一家でワルシャワへ移住している。2人の出身地はウクライナの中でもロシアに近い位置で、第一次世界大戦後に確定される国境線の向こう側であった(後述)。

クラクフ 父アポロ・コジェニョフスキ(1820-69)の晩年の居住地、すなわちコンラッドが幼年期を過ごしたこの街では、1914年7月末、40年ぶりに父親の墓参をした際の記録“Poland Revisited” (1915)に描かれた場所を今も辿ることができる。チェスラフ・ミウォシュ著『ポーランド文学史』を見れば、「アポロ・コジェニョフスキはポーランド文学における名誉ある地位を占めており、皮肉な現実主義者にして不屈の勇士たる彼の二面的態度は、ジョウゼフ・コンラッドの作品の研究者なら誰もが顧慮しないわけにはいかない」(440)と、「ロマン主義」の章の中、「ある一族の物語」との見出しで詳述されている。クラクフで没した1869年、「葬儀は多数の群集が参列したため、勇氣ある闘士への敬意を表明する示威運動のための舞台と化した」(439)。

その墓は、クラクフ中央駅からさほど遠くないラコヴィツキ墓地の中、所々に彫刻が置かれ樹木が茂る一角にある。この詩人・作家の名前は、どのタクシー運転手も知っているという名前ではないようであったが、墓地の管理事務所で見つけた「墓地内で有名人の墓10カ所を回る地図」にも記載があり、その地図さえあれば簡単に辿りつくことができる。

ルブリン この都市とコンラッドの接点は、一度目のウクライナ帰省の際(1890年2月)、ワルシャワからウクライナに向かう途中、ルブリンで親戚ザグルスキ Zagórski 宅に2泊した、という逸話にほぼ限られるが、コンラッドにとっては、ウクライナの叔父亡き後、この一家が出身地との縁を繋ぐ唯一の糸となった。1914年のクラクフ帰省の際、大戦勃発の混乱時に避難先を用意したのが Zagórski 一家であり、娘の Aniela はコンラッド作品のポーランド語訳を担うことになる。

ルブリンは東部境界地域への入り口に位置しており、町の中心にあるルブリン城は、1569年にポーランド王国とリトアニア大公国の合同を決めた会議の舞台となった。そこに展示されているマテイコの絵「ルブリン合同」の中には、居並ぶマグナートたちの一人として Roman Sanguszko の姿も描き込まれている。短篇“Prince Roman”のモデルとなった同名の Roman Sanguszko は、このルブリン合同の担い手の一人であった先祖に因んで名づけられた、と理解すればよいのであろう。

近郊のルバルトゥフ (Lubartów) には、サングシユコ家の邸宅が、現在は町の公的施設として使われている。また、その近くのコズウフカ Kozłówka には、同じくマグナートの一つザモイスキ家の瀟洒な大邸宅が博物館として公開されている (写真1)。



写真1 ザモイスキ宮殿博物館 (ルブリン近郊)

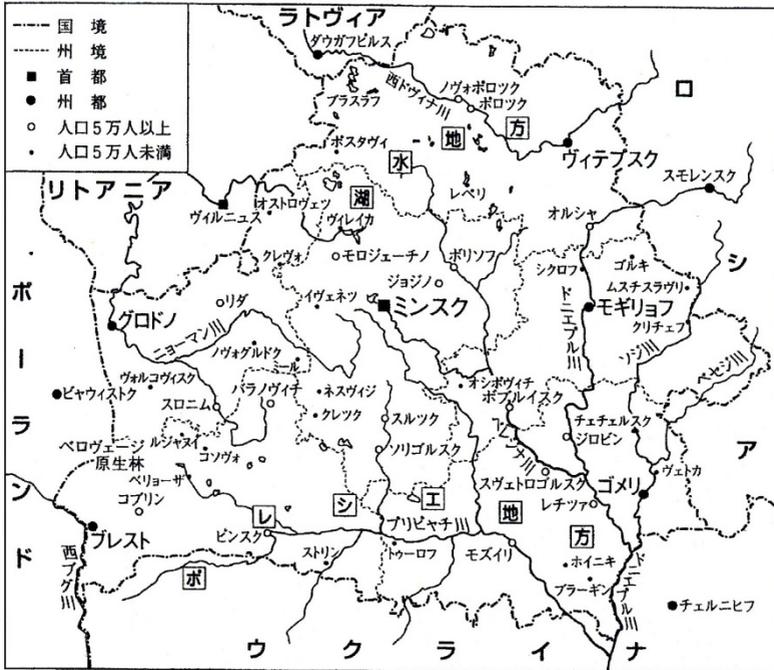
館内の見学コースを回っていると、重厚なビリアード台が置かれた The Library と呼ばれる部屋があった。解説によれば、19世紀に「イギリス式装飾」として流行したそうであるが、コンラッドの“Prince Roman”の中、語り手が「ウクライナの農村」にある「母方の叔父の屋敷」していた折、「大きなイギリス製のビリヤード台」が置かれた部屋で Prince Roman と出会う場面がある。ここから約400kmほど東にあるウクライナのシュラフタの屋敷との共通点が、一つの具体的な姿として浮かびあがった。それは、19世紀当時、東部境界地域という版図の中で、同じ文化圏にあったことを示すものと理解した。

3. ベラルーシ

移動セミナーのルートは、前述のように、大雑把にはクラクフとミンスクを結ぶ線に沿っているが、**地図2**「ベラルーシ地図」(服部 2004)で具体的に位置関係を確認する(地名カタカナ表記は地図での表記に揃える)。クラクフからヴィスワ河に沿って北上し、ポーランド北東部の主要都市ビャウイストク(Białystok)の東でベラルーシに入国。そこがニョーマン河畔の主要都市グロドノ(Grodno)。そこから東へ進み、リダ(Lida)、ノヴォグルドク(Navahrudak)、ミール(Mir)、ネスヴィジ(Niasvizh)という町を見学ないし宿泊地としながら、首都ミンスクまで。ミンスクから南西方向に折り返し、スロニム(Slonim)、ルジャヌイ(Ruzhany)といった聞いたこともない町

に寄った後、ポーランド国境のすぐ東側一帯を回り、最後にベラルーシ西端の要衝ブレスト(Brest)からブグ川を渡ってポーランドへ戻る、という行程であった。これらの地名のうち、ミンスクを除くすべての地点が、**地図1**での太線「第一次世界大戦後の国境線」の西側、つまり両大戦間期はポーランド領土内にあたる。

この行程で強く実感したのは、ポーランドはEUに加盟している、つまりジブラルタルからポーランドの東国境までは人も物も自由に往来可能な、一体化されたエリアである。その分、ポーランドとベラルーシの往来は限られた地点で出入国管理されており、グロドノへ向けての国境通過では、ヨーロッパ各地から走ってきた大型トラックが延々長蛇の列をなしていた。現在のヨーロッパを東西に分ける境界線は、鉄のカーテンの時代のそれよりもずっと東へ移動し、ポーランドの東側の国境線、つまりベラルーシおよびウクライナと接する国境線にあることが実感された。



地図2 ベラルーシ地図 (服部 2004)

以下、この移動ルートに沿って、コンラッドの生涯と作品の歴史的・地理的背景と直接・間接に関わる事柄をまとめる。

フロドノ 古くからの要衝であったが、17世紀後半からはポーランド議会(Seym)が定期的な議会を開く場所となり、1793年にはこの城で第二次三国分割の決定がなされた。今回の見学ルートには、高台の教会墓地にあるエリザ・オジェシュコヴァ(1841-1919)の墓が含まれていたが、それは、「1898年時点で、母国語を捨ててイギリスで作家活動を始めたコンラッドを批判する的外れなエッセイを書いた人物」だからではもちろんなく、19世紀末～20世紀初頭のポーランド文学史・社会史において重要な貢献があった女性作家だからである。ミウォシュの『ポーランド文学史』でも、「ロマン主義」に続く「実証主義」の時代を代表する作家の一人として、この地方都市で「創作家としても、時事評論家としても活躍した」人物として、多くの頁をあてて紹介されている(499-506)。現在のポーランドでも国語の教科書に作品が載り、当時の女子教育の唱道者としても知られるとこのことで、その墓は地元の名士として手入れが行き届いていた。

ちなみに、ミウォシュの『文学史』では、コンラッドを糾弾したエッセイ“The Emigration of Talent”の経緯についても論じられており、「祖国が1863年の蜂起ですぐれたインテリゲンツィヤたちを失い、しかも、才能ある人物が他国に流出したことに絶望していた」オジェシュコヴァ側の事情が記されている。

フロドノから東へ向かう途中、大規模国営農場(コルホーズ)が広がる平原の中、主要道路を外れたニョーメン河沿いの森の中に、「1863年蜂起参加者の墓」があった(写真2)。この1863



写真2 1863年の蜂起参加者の墓
(フロドノ近郊)

年は、コンラッドの生涯を運命づけた年でもある。その前年、この蜂起の準備に関わったとして逮捕された両親に伴い、5歳のコンラッドも「ニョーメン河を渡り、かつてポーランド王国の領土であった *borderland territories* を横切つて」(Taylor 646)、北ロシアの流刑地へ17日の旅をした。その行程の一部は、今回のベラルーシ内の移動ルートと重なる。

ノヴォグルドク この町は、詩聖アダム・ミツキェーヴィチ(1798-1855)ゆかりの場所として、ポーランドに知らぬ人はいない場所であり(その場合の地名表記はノヴォグルドク *Nowogródek*)、生誕地ザオシエ *Zaosie* も近い。町の幾つかの教会の一つ、ミツキェーヴィチが洗礼を受けた教区教会は、1812年、ナポレオン軍の食糧庫として使われたとのこと。コンラッドが父親から読み聞かされたという叙事詩 *Pan Tadeusz* は、ナポレオン戦役時のこの近郊が舞台である。同じ戦役を題材とする“The Warrior’s Soul”の舞台、退却時の「ベレジナ河」は、ミンスクの北東ポリソフのあたり。A *Personal Record* で回想される Nicholas B.の逸話(退却時の食糧欠乏と the *Lithuanian village dog*)が展開する「広大なリトアニアの森」は、この一帯を形容する呼称でもある。

ミールとネスヴィジ ベラルーシ国内では2カ所がユネスコ世界遺産(文化遺産)に登録されており、「ミール城の建築物群」(登録2000年)と「ネスヴィジにあるラジヴィウ家の建築、住居、文化の遺産群」(同2005年)がそれにあたる。

ポーランド史で「マグナート」と呼ばれる有力貴族の家系について、コンラッド研究では、主に“Prince Roman”との関係で、サングシュコ *Sanguszko*、ラジヴィウ *Radziwiłł*、ポトツキ *Potocki* といった名前に聞き覚えがあるが、これらの家系は、現在のポーランド国内のみでなく、東部境界地域に多くの居城・邸宅を構え、あるいは町そのものを所有していた。ネスヴィジにはラジヴィウ家の居城があり、町全体がその影響下で発展したラジヴィウの城下町といえる。ミール城は様々な権力者の手を経ているが、一時期ラジヴィウ家の所有であった。世界遺産登録は当該国からの申請によって登録手続きがなされるが、ベラルーシ国内の文化遺産二つとも

がポーランド文化の影響を伝える遺産群であることは、東部境界地域のかつての上層文化の担い手を示している。

ルジャヌイ この人口 3,000 ほどの小さな町が旅行ルートに入っていたのは、上記のマグナートの一つ、サピエハ **Sapieha** 家の大邸宅遺跡ゆえである。現在は廃墟のままであるが、崩れ残った柱廊からだけでも元の建築物の壮麗さが想像される（写真3）。これが現在のポーランド領内に位置していれば（第二次大戦後の国境線がほんの少し東に設定されていれば）、ルブリンのザモイスキ宮殿のような姿に修復がなされていたに違いない。

このサピエハ家は、コンラッドと無縁ではない。1918年11月にポーランド独立回復がなされて後、1920年2月17日付で、コンラッドは当時の在イギリス大使 **Prince Eustachy Sapieha**（翌年には本国での外務大臣）から、「イギリスでのポーランド文化普及活動に協力してもらいたい *initiate and chair a "club of friends of Poland"*」という依頼の手紙を受け取る(Najder 533)。その依頼に対し、コンラッドは、「自分はすでに引退の状態にあり、健康



写真3 サピエハ家の宮殿跡（ルジャヌイ）

もすぐれない」として丁重に断わる (CL 7, 29)。コンラッドがこのサピエハの家柄について知らないはずはなく、またサピエハにしてみれば、すでにイギリスで名をなした人物、ましてアポロ・コジェニョフスキの息子であれば祖国のために協力を惜しまないと期待したであろう。名門 Sapieha の末裔から依頼を受けたことを名誉としながらもそれを断ったコンラッドの手紙は、自分と祖国との関係について 1920 年時点で公式に態度表明したものであるとして、示唆に富む。

この旅行では、いくつもの教会（カトリックあるいはロシア正教）、貴族の邸宅（博物館）ないし邸宅跡などを回ったが、とくにカトリック教会（この地域ではポーランド文化の象徴）の歴史を説明するくだりにおいて、毎回繰り返される年号があった。それは、「1830 年の反ロシア蜂起が制圧されるに伴って、カトリック教会はロシア正教会に替わった」、「1863 年の反ロシア蜂起が制圧されるに伴って」に同じ文言が続き、「1918 年の独立回復によりカトリックに戻り」、それに続く 1919-20 年の戦乱で破壊され、あるいは 1941 年のナチス侵攻に続く独ソ戦で破壊され、1945 年からのソ連時代には家畜小屋や倉庫として使用され、1990 年以降にロシア正教会に戻り、というパターンである。1830 年、1863 年は、*A Personal Record* や“Prince Roman”に刻み込まれた年号であるが、今回の行程を回りながら、1919-20 年におけるこの地域の不穏さ・不安定さが強く印象に残った。ベラルーシ国内で最古のカトリック教会の墓地には、「1919 年の混乱時に誘拐・殺害され、ミール城の井戸に投げ込まれた神父の墓」があったりする。第一次世界大戦の東部戦線が 1918 年 3 月に休戦となった後、ソヴィエト・ロシアとドイツの狭間に置かれたこの一帯で何が起こっていたのか。そして、それはイギリスにいたコンラッドにどう関係したのか。

ここで、再び地図 1 に戻り、太線「第一次大戦後の国境線」に注目し、この国境線がどのように画定されたのか、この地図の出典である論文を参照する(吉岡 2012)。この論文の中、Conrad's Polish background に関わる点として、「1918 年 11 月 11 日、第一次世界大戦が終結し、ポーランドの 123 年ぶりの独立回復が確実なものとなったとき、ポーランドがどのような国境線を持ち、どのような人びとが住むことになるのか、ポーランド人の間

でも、国際社会でも統一した了解は実はなかった」(ibid., 11)という事情を考える。吉岡論文によれば、このとき3つの構想があった。

構想の一つは、「ポーランドの領域をポーランド人が多数を占める地域に限るというもので、特に戦後処理を主導するイギリスがこの考えを支持していた」(ibid.)。その線は、後日、第二次大戦の修羅場を経た後の国境線、すなわち現在の国境線として姿を現わす。

二つ目の構想は、「かつてのジェチポスポリタ（分割前のポーランド＝リトアニア）の領域を回復するというもので、独立ポーランドの国家元首となったユゼフ・ピウスツキらが唱えていた」(ibid.)。この場合、「ロシアの西部国境をなるべく東方に押しやっただうえで、ロシアとポーランドの間に位置するフィンランド、バルト諸国、ウクライナなどを独立させ、ポーランドと連合させることを模索」するもの(ibid.)。

最後三つ目は、「可能な限りでポーランド人居住域を版図に含め入れ、周辺諸民族を同化しつつポーランド人国家としての統合を追求する」というもの(ibid., 12)。

つまり、ポーランドは1918年11月に独立回復したものの、西ヨーロッパが大戦終結で一息ついている時期に、「自らの軍事行動と外交交渉によって」(ibid.)東部国境線を有利に決めるべく、1920-21年のソヴィエト・ポーランド戦争を戦わざるを得なかった。1920年夏にはソヴィエト軍がワルシャワの対岸まで攻勢をかけるという展開がありながらも、結局、1920年10月にポーランド側に有利な戦局をもって膠着状態となり、1921年3月のリガ条約で戦闘中止となる。この条約において、「ポーランドが勝ち取った」形で、ようやく東側の国境線が画定したのであり、それが地図1での太線である。その結果、「ポーランドはポーランド人居住域をおおむね含め入れたが、ベラルーシ人居住域・ウクライナ人居住域はポーランド・ソヴィエト間で分断される」ことになり、「隣人たちとの関係という観点からは禍根の残る、必ずしも理想の国境線ではなかった」(ibid.)。

イギリスにいたコンラッドは、この時期、*The Rescue* を仕上げながら、1920-21年のソヴィエト・ポーランド戦争時は「日々の戦局情報を追い」、部屋にはポーランド軍を率いるピウスツキ將軍の騎馬姿の水彩版画が掛けてあった(Najder 529)。一方、前述の Prince Sapieha 駐英大使からの働きか

けは、その最中の1920年2月であった。依頼の内容は「文化」に限定したものであったが、ポーランド側が国境線画定に向けて「自らの外交交渉」という大きな枠組みの中で、特に「戦後処理を主導するイギリス」への働きかけを進める活動の一環であったに違いない。

ここで注目したいのは、コンラッドの出身地は、前述のように、**地図1**での太線「第一次大戦後の国境線」の東側に位置していたという点である。両親らが1861年前後に命がけて志したポーランド独立回復は達成されたが(彼らが構想した独立は、上記の二つ目の構想に近いものであったろう)、その家系が200年以上にわたりシュラフタ地主層として生活してきた地方はその版図に入らず、ソヴィエト・ロシアの掌中に入ることが決まった。つまり、この1919-21年時点で、東部境界地域のうち、コンラッドにとっての「ポーランド」は「喪失」の領域となった。

そのことをコンラッドはどう認識していたのか。それを窺わせる記述として、*A Personal Record*のAuthor's Note(1919年執筆)の末尾で両親に言及している箇所を読む。「この2人の霊はもう安息の地に戻してよかろう。...この地上における2人の最後の痕跡がわたしとともに永久にこの世から消える時を待ちながら、まだ姿をとどめている安息の地に」(PR, x)。このときのポーランド国境の確定により、コンラッドにとっての父祖の地はポーランドの版図からは「失われた」のであり、そこでの生活基盤は「永久にこの世から消える」ことを、コンラッドは個人的なノスタルジーではなく、1919年時点での政治的決着として理解せざるを得なかったと考える。

となれば、コンラッドが1874年に国外で船員になると言い出したとき、叔父タデウシュらがそれを認めたのは、男子が成人すればロシアで徴兵される危険があったという事情もあろうが、この地が20世紀に辿った運命を考えれば、聡明をもって知られる叔父は、「次の世代がこの地で旧来の生活を継続できるか?おそらく無理だろう」という判断をしたとしても不思議はない。それは、結局、賢明な選択であったと言えるのであろう。

最後に一点、今回の移動セミナーのタイトルにある「共有遺産」という概念について。第二次大戦後の国境線によって、ポーランドはさらに大きく東部境界地域の領土を「喪失」する。フロドノ、ブレスト、リヴォフなど、素人目にも「歴史的にポーランドに帰属する」位置に見える。実際、

現在の国境線の東か西かによって、たとえば有力貴族の邸宅跡の修復状況が明確に異なることを目にした。一方、国境線の東側で打ち捨てられたままだったポーランドの文化遺産群のいくつかでは、EUの資金で修復が進行中であった。それは、「歴史的にわが国固有の領土」という禍根を主張するよりも、それらを当該地域の「共有遺産」と位置づけ、修復への資金提供といった方法で手当てするという選択であろう。それ以外に方法がないとはいえ、20世紀の国境線変遷がヨーロッパ東部にもたらした痛みを知る人々の成熟した領土概念と理解した。コンラッド研究の途上にはこのような旅も有り得るのか、という感動が残った。

4. ポーランドにおけるコンラッド研究の拠点

補足の形になるが、2005年に活動を開始した The Jagiellonian University Joseph Conrad Research Centre について記しておく。クラクフのヤゲロン大学に設立されたこの機関については、ウェブサイトを見ればわかるというものの(www.conradianum.polonistyka.uj.edu.pl)、実際に訪問して Director から話を聞いたうえで報告をしておく。

私がこの機関を訪ねたきっかけは、*Conrad News* という1976-95年にグダニスクで発行されていた雑誌に掲載された1論文を入手したく、しかし日本では所蔵がなく、その後雑誌らしき *Con-texts: Journal of the Joseph Conrad Society (Poland)* も1997-99年以降は休刊している、といった事情をネット検索していて、この機関に行き当たったからであった。

もともとポーランドでのコンラッド研究には2つのグループがあることは、漠然とながら目に留まっていた。一つは Z. Najder 氏を中心とするもので、グダニスクにある Maritime Museum に置かれていた有志の団体 Conrad Club と人脈で重なっており、上記の雑誌 *Conrad News* と *Con-texts* の発行母体であり、近年は Najder 氏が所属する Opole University が定位置の一つとなっていた。もう1つは、ルブリンの Maria Curie-Skłodowska University の Prof. Krajka を中心とするもので、1991年に第1回国際会議を主催して以来、数年ごとに国際会議を開き、*Conrad: Eastern and Western Perspectives* のシリーズで学会論集や単著を継続刊行してきた。アメリカの大学と提携

しての刊行ゆえ、ポーランド国外でも入手しやすい。

この2系統は、ほとんど合流することなく、それぞれ別途に国際会議と刊行物の形で活動を続けてきた、その理由はここでは触れないが、このクラクフのセンターはNajder氏の蔵書を引き継ぐ形で設立された機関である。今までとの大きな違いは、このセンターは国内きっての拠点大学に置かれた常設機関であり、年報 *Yearbook of Conrad Studies (Poland)* は公的補助金を受けて刊行されており、こうした形でクラクフに定位置ができたことの存在感は大きい。また、ルブリンの大学との連携も進行中のようであった。上記サイトでは、*Yearbook* の全文と蔵書リストも公開されている。日本国内では入手困難なポーランド国内刊行の文献を探す際、またクラクフにコンラッドゆかりの地を訪ねる際、有用な窓口にもなる。

注

- ¹ 図1の出典(吉岡 2012)は入手しにくいものであるが、あえてこの地図を転載するのは、“Conrad’s Polish background”と第一次世界大戦後の国境線確定との関わりについて、筆者が知る限り、この図が最もわかりやすいからである。地図は、*Atlas historii Polski. Mapy i komentarze (Warszawa, 2006)*, s. 21 より吉岡氏が作成したもの。
- ² 地名の欧文綴りとカタカナ書きは、ポーランド語、ベラルーシ語、ウクライナ語、ロシア語が錯綜する地域であり、門外漢が厳密な統一を試みるよりも、同定可能な範囲で適宜の扱いとする。
- ³ *Kresy* についての引用文の出典(関口 2011)は入手しにくいものであるが、あえてこれを引用するのは、今回の移動セミナーの主旨を明確に説明したものである。
- ⁴ これらの場所を訪ねてみようとした場合、ポーランドについては個人旅行で可能であるが、同国内でのコンラッド国際会議に参加すれば、ゆかりの地をめぐるエクスカージョンが組まれていることが多く、有用な機会となる。実際、今回個人で回った行程のうち、ルブリンについては、2010年に同市の大学で開催された学会に参加した田中賢司氏らから事前に情報提供を受けたものである。ウクライナは個人では一見無理そうであるが、ビザは不要であり（ベラルーシはビザが必要）、ルブリンから国境を越えるバスか列車に乗れば済むことで、特に、レビューはポーランドに近く、またユネスコ世界遺産の歴史都市として、個人で訪問しやすい条件にある。

引用文献

- チェスワフ・ミウオシユ著『ポーランド文学史』関口時正他訳. 未知谷 2006.
- 関口時正「ヴォウオディヨフスキ殿とカミエニェツへ——シェンキェーヴィの『トリロギア』再読」. 篠原琢編『ヨーロッパ東部境界地域の共有遺産研究 I——ガリツィア』, 11-32. 東京外国語大学 2011.
- 服部倫卓『不思議の国ベラルーシ——ナショナリズムから遠く離れて』. 岩波書店 2004.
- 吉岡潤「20世紀ポーランドの国境線と隣人たち」『ポーランドとその隣人たち 1——フォーラム・ポーランド 2011 年会議録』, 10-13. NPO フォーラム・ポーランド組織委員会 2012.
- Conrad, Joseph. *The Collected Letters of Joseph Conrad*, Vol. 7, ed. L. Davies and J. H. Stape. Cambridge University Press, 2005.
- . *A Personal Record*. 邦訳『コンラッド自伝』木宮直仁訳. 鳥影社 1994.
- . “Prince Roman.” 邦訳「プリンス・ローマン」『コンラッド短篇集』井上義夫編訳. ちくま文庫 2010.
- Krajka, Wiesław, and Katarzyna Sokołowska. “Conrad’s Polish Footprints: A Reminiscence from the First International Joseph Conrad Conference at UMCS Lublin Poland, September 1991.” In *Context for Conrad*, ed. K. Carabine et al., 3-20. Boulder: East European Monographs, 1993.
- Najder, Zdzisław. *Joseph Conrad: A Life*. New York: Camden House, 2007.
- Taylor, Nina. “Landscapes of ‘Prince Roman’.” *The Conradian* 13, no. 2 (1991); rept. in *Joseph Conrad: Critical Assessments*, ed. K. Carabine, vol. 3, 641-58. Helm Information, 1992.

地図

1. ポーランド国境の変遷(吉岡 2012)
2. ベラルーシ地図(服部 2004)

写真(筆者撮影)

1. ザモイスキ宮殿博物館 (ルブリン近郊)
2. 1863年の蜂起参加者の墓 (フロドノ近郊)
3. サピエハ家の宮殿跡 (ルジャヌイ)

(しだら やすこ 武蔵大学非常勤講師)